

開発途上国の稀少な記録を保存し続ける図書館

樹神 昌弘

私は、二〇一四年三月末日までアジア経済研究所（以下、アジ研）に勤務していた。現在は別の機関に勤めているが、今もアジ研図書館にはたびたびお世話になっている。そうした私にとってのアジ研図書館の最大の魅力は、過去のアジアのデータが網羅的に所蔵されているという点である。

現在のアジアの低所得国の将来を考えるためには、先発ASEAN諸国の三〇年前の姿、アジアNIEsの五〇年前の姿を知ることが時に参考になる。すると一九六〇年代から一九八〇年代のアジアのデータが必要になる。しかし、そうしたデータは必ずしも容易にはみつからない。二〇〇〇年代以降のデータであれば、電子化されたものをインターネット上からダウンロードできることも多い。一九六〇年代から一九八〇年代のデータであってもGDPなどの代表的なデータは、インターネット上でみつけれらる。しかし、この年代の少し細かいデータになると、インターネットからの入手は難しくなる。さらに、こうしたデータは研究対象国の図書館へ出向いたとしてもみつからないことがしばしばある。未だ開発途上にある国にとって、ある定期刊行物がたとえ自国政府発行のものであっても、それを欠落の少ない形で保存し続けることは、必ずしも容易ではないのであろう。ところが、こうした入手困難なアジアの少し前の時代のデータが、アジ研図書館には冊子体の形で大量に保存されているのである。

私自身の経験として、ある中所得国に駐在している際に、その国の最高峰の大学の付属図書館でもその国の政府発行の古い統計書を見つけないことができないということがあった。しかし、実はその統計書はアジ研図書館に所蔵されていた。このようなことを数回経験した。

別の経験としては、一九六〇年代から一九八〇年代のアジアNIEsのデータを扱ったある有名な研究に関連するものもある。その先行研究の内容を一九九〇年代以降にも延長推計してみたいと私は考えた。ここで、延長推計の結果と元の先行研究の結果を比較可能なものにするためには、先行研究で利用されたデータと整合するデータを利用する必要がある。ところが、先行研究の著者は、研究対象国の政府からデータを磁気テープの形で提供されたことと記していた。研究対象国の政府とそのようなコネを持たない私は困難に直面することになった。そこで、とりあえずアジ研図書館の冊子体ベースの統計を使って推計を行ってみることにした。すると、先行研究と年代が重なる部分の推計結果は、先行研究と類似のものとなった。つまり、アジ研図書館の冊子体ベースの統計は、研究対象国政府所蔵の磁気テープ内の統計と、同様の情報を含んでいたのである。

このように、少し前の時代のアジアのデータを利用した研究を行う場合には、アジ研図書館の利用は、利用者には大きな便益をもたらしてくれるように思う。

また、統計資料に関して、アジ研図書館の利用価値が高い点として、図書館のホームページにデータソースが紹介されるようになった点も挙げられる。例えば、ある研究者がマレーシアの労働者数についてのデータを入手したいと考えていたとしよう。この時、労働者数ほどの統計書に記載されているのだろうか。このようなデータソースに関する情報が、アジ研図書館のホームページで紹介されるようになった。これによりアジ研図書館の利用価値は大きく増したように思う。欲をいえば、データソースの紹介について研究者との協力があるとさらに情報の質は高まると思われる。ある国の労働者数についていえば、しばしば複数のデータソースが存在する。それではどの資料を利用すべきなのか。実際には、資料ごとにデータ作成の方法が異なるため、用途によって利用すべき資料は異なる。こうした点について、より詳細な解説、あるいはこれら資料に関する先行研究の紹介などがあるとアジ研図書館の統計資料の利用価値はさらに高まるであろう。

アジア地域は年々発展を続けており、その政治的、経済的重要性は日増しに高まっている。一方で、すでに記したように、アジア諸国の少し前の時代の記録は、当該国にも残されていないケースが少なくない。つまり、アジ研図書館は、少し前の時代のアジア諸国の記録を網羅的に所蔵する世界で唯一の図書館であるかもしれない。そのような図書館を利用できることの幸運を喜びながら、引き続きアジ研図書館を使い倒したい。

（こだま まさひろ／神戸大学大学院国際協力研究科准教授）